

卒業生インタビュー

箕面市消防本部豊能消防署

眞野 一樹（現代ビジネス部現代マネジメント学科救急救命コース
2016年度卒業生）

あこがれの消防官になり、人命救助にあたっています

私は消防官として、大阪府の箕面市消防本部豊能消防署に勤務しています。救急救命士の資格を持って入職しましたが、箕面市のような小規模自治体では、救急活動だけでなく、火災が起きれば消防隊員として出動しますし、救助が必要な場面では救助隊の一員にもなります。

生まれも育ちも箕面市で、実家のすぐ近くに消防署がありました。小学生の頃、通学の途中に消防署の前を通りかかると、いつも隊員が訓練をしていて、それがすごく格好良かったんです。手を振ると、隊員がにこやかに手を振り返ってくれて、親しみも感じました。いつしか抱き始めた消防官への憧れは、成長するにつれて「ぼくも消防官になるぞ」という具体的な目標へと変化していきました。

高校生になっても、その目標は変わりませんでした。同時に大学で学びたいとも思うようになり、両方の願いがかなう先として京都橘大学の救急救命コース（※）を見つけました。「この大学で勉強して、救急救命士の資格を取りたい」というのが本学に入学した動機です。

※2014年の入学当時は現代ビジネス学部現代マネジメント学科救急救命コース。2016年の改組により、現在は健康科学部救急救命学科。所定の単位修得により卒業時に救急救命士国家試験受験資格を取得できます。

初めての実習で、人命救助を職業とすることの厳しさを学びました

人命救助の世界に飛び込んだことを実感したのは、大学に入って初めて救急救命実習を受けたときです。練習用人形を使って胸骨圧迫の仕方を学び、心肺蘇生には胸骨を約5cm押し込む必要があると教えられました。（1回生時点での市民の一次救命処置の方法。）人形は5cm押し込むとカチッと音が鳴る仕組みですが、やってみると5cmも押し込むのは大変で、なかなかカチッと鳴らないのです。それを10分間も続けるようにというのが先生の指示で、学生は全員汗だくになり、なかには手の皮膚が剥けた人もいました。でも、授業の終わりに先生の口から出たのは「病院まで10分では到着しないぞ。君たちがしんどい顔をしたからといって、傷病者を救えるわけではない」というような意味の言葉です。

それを聞いて、「ぼくらが疲れたと言っている場合ではない。本当に命を救う立場に立ったのだ」と実感しました。この瞬間、あらためて人命救助を職業にするのだと覚悟をしたのです。

全日本学生救急救命技術選手権での優勝をめざして、猛訓練しました

大学生活で多くの時間を費やしたのは、救急救命研究会という学内サークルの活動です。このサークルの略称は“TURF”で、“Tachibana University Rescue Family”の頭文字を取ったものです。

TURFは、一次救命措置の普及活動を行い、救命率の向上を目指すという、とてもボランティア要素の強いサークルで、私が入学したとき、すでに先輩たちが活発に活動していました。私は、先輩から少しでも学びたい、先生とも距離を縮めたいという思いがあり、1回生のときに入部しました。

TURFで学んだことはとても多いのですが、なかでも全日本学生救急救命技術選手権への出場は多くの学びを得ました。部員の中で「橋救急隊」というチームを組み、朝7時から夜9時まで、授業以外の時間は救急救命技術の基本と応用の訓練に励んだことが、将来携わるであろう救急救命の仕事にいちばん向き合う時間だったかなと思いますね。

先生方はもちろんのこと、卒業して現場で実務に就いている先輩方も指導に来てくださいましたし、大学の設備も充実していて、その恩恵を最大限受けることができました。

学内サークル TURF の部長になって、活動経費の捻出に苦心しました

TURFは、最初は地域のイベントや町内会のお祭り等に救護要員として出向いていましたが、その活動を見た他の団体からイベントでの救護活動の依頼が来るようになりました。無資格者の学生なので一次救命措置や応急処置しかできないということに了解を得たうえで、さまざまなイベントに参加していたら、JR京都駅で行われたJR西日本あんしん財団の心肺蘇生法普及イベントなどへと一気に活動場所が広がりました。この財団は、その後、TURFに資機材を提供してくださっています。

活動場所が広がるのはうれしいのですが、遠方に行くとなんか交通費がかさみます。でも、部費は値上げしたくないので、大学が立地する京都市山科区の「山科“きずな”支援事業」に応募して、年間約30万円の助成を受け、それを救護活動に必要な資機材の購入や交通費に充てました。

私が部長をしていたときは、大阪府高槻市、JR大阪駅、滋賀県近江八幡市など、遠方から呼ばれることが増えたので、交通費の捻出に苦労するようになりました。活動場所から家が近い部員には、公共交通機関ではなく自転車やバイクでの活動参加をお願いしたりして、できるだけ交通費を節約したりしました。

大学から費用の助成はありましたが、とてもまかなえる額ではなかったし、事前の申請手続きも複雑でした。派遣人数は直前で変わることがあるので、もう少し簡単に柔軟な申請方式にして、助成額ももっと多ければかなり助かったと思います。

課外活動の経験が、消防訓練の企画立案に役立っています

部長として苦労したのは、各活動に派遣する部員の確保やその組み合わせです。それぞれのイベントに必要な人員数を把握したうえで、やむを得ない事情での欠席や遅刻を想定して余裕のある人員配置を考える必要があります。また、同じ日にイベントが2つ重なることもあるので、放課後は2人の副部長と集まっては相談することもしばしばありました。

特に小学校の夏休みキャンプでの救護活動は、子どもたちが学校に泊まるので、私たちもシフトを組んで、泊まり込みで待機しました。そういう場合は部員のパワーバランスも考慮してシフトを組む必要があるなので、パズルのようでしたね。

TURF が学外で活動するときは、先生に同行していただくか、それが無理なら緊急時の連絡先を確認する必要があるので、その把握や調整もけっこう大変でした。

このような経験は、現在の職場において様々な企画を立てるときに役立っています。消防署以外の場所で訓練を実施したり、他の消防署と合同で訓練をする場合、規模が大きくなると、詳細な起案書を作成し、上司の決裁を得た後に実施することになります。

この一連の作業は段取りや準備に時間がかかることもあり、「こんな訓練があったらいいな」と言う職員は多いですが、自ら企画を立てる職員は少ないです。しかし、私は大学時代の経験があるので、訓練の企画立案を進んで引き受けています。

準備段階で壁に当たってしまうこともありますが、TURF の活動をとおして培った調整能力のおかげでなんとか乗り越えられています。大変なことも多いですが、訓練の成果は必ず市民のみなさんに還元されることだと確信して、推進しています。

コミュニケーションスキルを磨けたことも、大学時代の成果です

もうひとつ、大学での活動が現在の職場で活かしているなど感じるのはコミュニケーション能力を養えたことです。

救急でも、救助でも、火災でも、消防官の仕事は人命が最優先で、そのためには被災者・傷病者の状態を正確に把握することが重要になります。それには5分とか10分といった、きわめて短時間の間に「この人なら信頼できる」と思われるような関係を築いて、時にはご家族も知らない個人の情報を話してもらわねばなりません。

だから、傷病者への声のかけ方も、「〇〇さん、救急隊の眞野です。どうされましたか」と、名前を呼んで問いかけるのが原則ですが、時には「おっちゃん、どうしたんや」と聞くほうが、親しみや安心感を持ってもらえて、救護に必要な情報をスムーズに得られる場合があります。相手が求めている対応をする必要がありますが、一刻を争う現場では、その辺りの素早い状況判断が求められるのです。

そういう臨機応変な対応は、ある程度の経験を積みばできるようになりますが、私は大学時代に町内会や小学校の保護者の方々、イベント来場者の方など、さまざまな世代や立場の方と交流できたおかげで、初めて現場に立った時点から新人としては傷病者の方とのコミュニケーションが取れていたほうかなと思います。

他の学部・学科の仲間と一緒に活動したことも、大きな学びになりました

看護学科、児童教育学科、歴史遺産学科など、他の学部・学科の学生と一緒にTURFで活動できたことも、得るものが大きかったです。たとえば児童教育学科の人は、小学校での救護活動に参加してもらいましたが、子どもに話しかけるときは目線を低くして相手に合わせることや、子どもへの効果的な注意の仕方など、そばで見ているとすごく勉強になりました。そのノウハウをTURF全体で共有するために、TURFの技術講習会に講師として来てもらったこともあります。

彼らをTURFに勧誘するときは、「子どもの救命方法を完璧に教えるから、とにかく1回だけ来てみて」と頼むなど、相手に合わせて声のかけ方を工夫して、かなり積極的に取り組みました。彼らが参加してくれたおかげで、救急救命学科の学生も多くのことを学べたので、他学科との連携については学生部員が努力するだけでなく、大学としても支援してもらえればありがたかったなと思います。

現場では外国人とのコミュニケーションの経験不足を痛感しています

TURFの活動以外にも、先生方と一緒に救護サポーターとして京都マラソンや大阪マラソン等のスポーツイベント、市民向けの一次救命措置講習に参加したので、4年間の大学生活はすごく多忙でした。でも、毎日が充実していて、楽しかったですね。

数えきれない楽しい思い出の中で、強いて2つだけ挙げるなら、沖縄での水難救助訓練の実習とアメリカでの特別実習です。アメリカでは救急医療のプロフェッショナルを養成する施設を訪問して、そこで学ぶ人たちと交流したり、一般人は立ち入り禁止の施設も見学できて、大きな刺激を受けました。

ただ、せっかく海外から多くの人を訪れる京都の大学で学んだのだから、外国の方の救護活動にあたる経験がもっと積めたらよかったなと思います。大阪大学の箕面キャンパスには外国語学部があって、箕面市内には留学生も多いのですが、翻訳アプリを使った対応だけではあまり寄り添えている感じがしないのです。

それと、単に語学力を養うだけでなく、言葉がうまく伝わらない状況で効果的にコミュニケーションする訓練も学生時代にもっとできたらよかったなと思いますね。

